

「主を拝み、ただ主に仕えよ」（ルカ四章一〜一二節）

1 洗礼と試練

年が明け、新しい年、福音書が記すイエスの生涯に取り組んでいます。キリスト教の原点と言ってよいところです。

先週私どもが学んだのは、イエスが、洗礼者ヨハネから、洗礼（バプテスマ）を受けたその事実と意味です。

事実としては、イエスは三十歳の頃に洗礼を受けます。ガリラヤのナザレを出て、ヨルダン川沿いで活動していたヨハネのもとに赴き、洗礼を受けます。その後神の国の宣教のためガリラヤに帰ります（四・一三）。

三十歳の頃と申しました。それまでの三十年間、彼はどのような生活をしていたのでしようか、じつは聖書にはほとんど何も書いてありません（二・四一以下）。ただいくつかの箇所に関連することが書いてあり、まとめて言えば、彼の仕事は、大工でした。父の職業を継いだものです。兄弟は四人、姉妹は二人以上いたようです（マルコ六・三）。母はマリア、父ヨセフは早く死んだらしく、イエスは長男として一家の生活を支える立場にありました。

さてイエスの洗礼の意味です。それを考えるには洗礼者ヨハネの洗礼の意味が思い起こされなければなりません。ヨハネの洗礼は「悔い改めの洗礼」（三・三）と言われています。少し紋切型になりますが、いま私どもが教会でしている洗礼と比べて言えば、ヨハネの洗礼が水の洗礼とすれば、教会の洗礼は聖霊による洗礼です。また教会の洗礼は悔い改めの洗礼ではなく、新しく生まれる洗礼、救いの洗礼、そう言うてよいと思います。

それならイエスはそれを受ける必要があったのでしょうか。というのも彼は神の子であって、罪とは無関係、したがって悔い改めたことのしるしとしての洗礼、罪の赦しが与えられる洗礼（三・三）は要らないはずだからです。先週問題にしたのはそのことでした。でもイエスは受けたのです。それが事実です。受けて、そして歩もうとした。言い換えれば、イエスは一人の罪人の道を、この歩みの先に十字架が立っている道を歩もうとした。メシア（キリスト）であるイエスは、そのようにして歩み始めたのです。

しかし、こうして歩み出したイエスですが、すぐ故郷ガリラヤに帰って宣教を開始できたわけではありませんでした。それが今日の聖書から分かります。イエスは悪魔の誘惑を受けたというのです。試練に出会ったというのです。マタイもマルコも、そして私どものこのルカも、福音書はみな等しく、この事実を伝えていきます。イエスは洗礼を受けて直ちに試練を受けた。この二つの事柄、すなわち、洗礼と試練は切り離すことができないのです。

事情は私どもにおいても違わないのではないのでしょうか。私どもの洗礼は、私どもが古い自分を捨てて、それに死んで、新しい自分に、神と共なる自分に生き始めることです。悪魔の支配から、キリストの支配下に移し置かれたことのしるし、そのようにして神のものとされて生活をはじめていることの見えるしるしです。しかし洗礼を受けてから、私どもも、しばしば、かえってさまざまに疑いが深まったりもするもの

です。いま確信をもって辿り始めた道に対する私どもの忠実さが問われることにもなるのです。神の子イエスが、ここで、いつそう深い意味で、洗礼にふさわしく、つまりここでは、一人の罪人として歩み始めたことにも信実に歩もうとしているか、それが試されたとしても、不思議ではありません。その試練は、イエスにおいて、十字架の死にいたるまで続いたのです（二二・二八他）。信仰の生活には、そうした試練や困難がつきものです。おそらくそれは私どもの生涯づくものと言っても過言ではありません。その試練が、イエスにおいても、すでにここで顔を出したのです。

キリスト（メシア）として神の国の宣教をになっていくのに、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた、神から聖霊をいただいた、それだけで資格が足りないというのは、もちろんありません。十分です。しかし、試練に遭ったということは、自分が歩もうとしている道がどのようなものか、もう一度はつきり自覚して歩み出すことを求められたということです。

2 悪魔の誘惑

今日の箇所のはじめに、試練が、神から、しかも荒々しい仕方ではじまったことが記されています。

さてイエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を、霊によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた（一〜二節）。

この試練、誘惑の中に、イエスが、自ら求めて入って行ったというわけではありません。どうしてそういうことがあるのでしょうか。「試みに遭わせないでください」という祈りは、本来主イエスの祈りであり、したがっていつも、いまま私どもの祈りでもあるのです。

この一〜二節によれば、イエスはヨルダン川から帰ると、間、髪を入れず、荒れ野へと、マルコによる福音書の表現を使えば「追いやられます」（口語訳）。追いやつたのは父なる神です。引き回したのはここで聖霊だと言われています。四十日間、いわばテストを受けたのです。

その場所は「荒れ野」と言われます。荒れ野と言えば、聖書では、何よりも、かつてエジプトのさい、モーセに率いられて通り過ぎたシナイの荒れ野を指します。ここでも荒れ野と言われていることは、その場所が具体的にどこであっても、あのシナイの荒れ野のことが重なって受けとめられるのです。イスラエルの民は彼らの不信仰の罰として四十年間にわたり荒れ野をさまよい、様々の試練を受けて、神を主として仰ぐ信頼を学んで行ったのです。イエスの荒れ野の誘惑は、イスラエルの荒れ野の旅と深く関連しています。

さて、悪魔によって、イエスに対する誘惑は三度試みられます。最初のやりとりはこうです。

そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じ

たらどうだ」。イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった(三〇―四節)。

このやりとりの悪魔のねらいは、イエスに、ただ神だけに信頼し、聖霊の導きだけに従おうとしているか、問うことです。

かつて出エジプトのさい、イスラエルの民は飢えに苦しみ、救いの神への信仰を無くしかけます。それでも主なる神は、日毎に、天からマナを降らせ、養ってくださったのです。

主イエスも、その空腹の果て、神にのみ信頼することができるとしようか。神が与えてくださらないかぎり、甘んじて苦しむということですが。誘惑がそこに忍び込みます。神の子としての力を使うことです。しかしイエスにとって、自分の必要のためにその与えられた力を用いることなど、あつてはならないことだったのです。神以外に望みをもたない、神の養いにしか頼らない罪人の一人として生きること、生きつづけること、それがイエスの答えでした(申命八・二)。

二つ目の誘惑は、人間の「権力と繁栄」という問題です。悪魔はイエスに世界のすべての国々を、一瞬のうちに見せます。

そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる」。イエスはお答えになった。「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」(六〇―八節)。

二つ目の悪魔の誘惑のねらいも、最初と同じく、ただ神だけに信頼し、聖霊の導きだけに聞き従おうとしているイエスを揺さぶる、イエスに問うことにあつたように見えます。

またここでも、出エジプトの故事を私は思い出します。エジプト脱出の旅の途中でそうでしたし、いよいよ約束の地カナンに入ったときは、その危険はますます大きくなつたのですが、イスラエルの民が、カナンの宗教、カナンの神に、心寄せることが起こつたのです。

カナンの異教の神々のほうが、強そうに見えた、生活を豊かにしてくれそうに見えたのです。「あなた方は神と富とに兼ね仕えることはできない」(一六・一三)というイエスの言葉を思い起こします。悪魔が誘っているのは、まさに兼ね仕える生き方にほかなりません。あちらの神もちよつと、こちらの神もちよつと、それでいいではないかと。イエスの答えははっきりしています。主なる神に信じ従うとは、この方だけ信じ、拝し、仕えることだと。

3 イエスの勝利

三つ目の誘惑は、前の二つが、イエスによって、み言葉によって退けられたのですが、悪魔もここで、同じく聖書の言葉を使ってイエスを誘惑します。場所はエルサレム、神殿の屋根の先端です。

「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。『神は、あなたのために、天使たちに命じて、あなたをしつかり守らせる』また『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』」。イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われる」とお答えになった(九〇―一二節)。

この三つ目も、最初の誘惑と二番目のそれと基本的には同じです。ただ神だけを信賴し、聖霊の導きだけに聞き従おうとしているイエスを、少しでも神以外のものに向かわせようとしています。

ここでも、「主を試す」という言葉は、イスラエルの荒れ野の旅路を私どもに思い起こさせます。飲み水がなく、民がモーセと争い、詰め寄る場面があります(出エジプト一七章)。モーセはそこで、彼らの態度を、主を信じない、主を試す行為だと言つてとがめます。この時は神は、モーセに命じ、杖で岩を打たせて、水を湧き出させておられます。

それ以上に、この第三の誘惑で私が思い起こすのはゲッセマネの祈りです。あのときイエスは、十字架を前にして、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください」(二二・四二)と祈っています。このイエスの心を一瞬よぎった思いは第三の誘惑の言葉の中で、詩編(九一・一一、一二)を使って誘惑した言葉と通じるものがあります。しかしイエスは、主を試してはならないと、ただ神を信じ、従い歩む道を選び取ったのです。

イエスがこうした試みに遭わざるをえないことについて、よく語っているのは「ヘブライ人への手紙」です。

この大祭司「イエス」は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかつたが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかつて、時宜にかなつた助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか(四・一五―一六)。

ここにイエスの試練の意味が明らかにされています。イエスは試練に出会わざるをえない私ども罪深い者と同じ立場に身を置いたのです。それは私どもの状況を、私どもの弱さ、悲しみと苦しみも自分のものとするためです。私どもの出会うことでご自分の出会わないものが何一つないためです。それこそが、洗礼者ヨハネの洗礼を受けた理由でありました。この罪人の道を、その先に十字架の立っている道を、イエスは歩みはじめます。

宗教改革者ルターは、この箇所に関連して、悪魔の力を甘んじて受ける神について語っています。イエスの神は、そのような神です。そしてこの神は、御子イエスの十字架において、悪魔の力を徹底して身に受け、受け尽くし、それゆえにイエスは死んで、悪魔に決定的な勝利を収められたのです。その決定的勝利を私どもが聖書から聞くのは、まだ少し先のこととなります。